

おおむらの史跡



天正遣欧少年使節頭彰之像

天正遣欧少年使節頭彰之像

目 次

大 村 の 歴 史	1
古 代 の 遺 跡	3
寺 院 と 神 社	4
城 跡 と 古 戦 場	8
文 人 ・ 武 人 の 史 跡	15
キ リ シ タ ン の 史 跡	20
郷 土 芸 能	26
大 村 寿 司 の 由 来	27
民 話 紹 介	28
資 料 大 村 氏 系 図	29
年 表	30
大 村 史 跡 等 位 置 図	卷末

大村の歴史

大村の古代

市内の各所から、旧石器・縄文・弥生・古墳時代にわたる遺物が数多く出土しており、大昔から古代人たちが住んでいたことがうかがわれます。

黒丸遺跡は水稲耕作の始まる初期の遺跡として大変重要です。富の原遺跡では、弥生時代の環濠集落の跡が発見され、鉄戈・鉄剣を所有していた事が判明しています。

花ひらく仏教文化

中世において、郡地区こおり（竹松、福重、松原）に郡七山十坊と呼ばれる寺院が建てられ、仏教文化の花が咲きました。また、大上戸川周辺にも多くの寺院が建てられ、活発に活動していました。これらの寺院は、キリシタン時代に全て失われてしまいましたが、地名として残っているものもあります。

大村氏の出自

大村地方を領した大村氏の出自については、江戸時代初めに幕府によって編さんされた「寛永諸家系図伝」をはじめ大村藩で編さんされた「大村家譜」等でも、藤原直澄なおすみを先祖としています。他の史料により、大村氏は肥前鹿島の大村方を本拠地とする地方豪族であり、鎌倉時代末期から南北朝の初期にかけて、現在の大村市周辺に移動してきた豪族と、その出自が修正されつつあります。

応仁の乱前後の大村氏と有馬氏

近世以降に整備されたとされる大村氏の系譜では、15代に数えられる純治すみはるは、島原半島の有馬氏との合戦が数年に及んだため、福重に好武城を築きました。16代純伊すみこれは、文亀元年（1501年）（諸説あり）有馬氏との中岳合戦よしたけに敗れ、呼子沖かからの加唐島に潜伏し、6年後に本領奪回を果たしました。この時、大村寿司という戦勝祝いの馳走が振る舞われ、黒丸踊という戦勝記念の踊りが始まったと伝えられています。

キリシタン全盛の三城城時代

純忠は有馬家から養子に迎えられ、18代領主となり、三城城を築きました。永禄5年(1562年)横瀬浦を開港して南蛮貿易を始め、その後、福田、つづいて長崎を開港し、今日の長崎市発展の端緒をつくりました。

永禄6年(1563年)には、洗礼を受けて日本初のキリシタン大名となり、領内の改宗を押し進めました。また、天正10年(1582年)には、九州のキリシタン大名大友宗麟、有馬晴信と共に天正遣欧少年使節団をローマに派遣したことは、世界的に有名です。

生涯を通じて近隣諸豪の侵攻が相次ぐなど戦乱の絶え間がなく、三城七騎籠りや菅無田合戦などの史話が残っています。

藩政の確立期、玖島城時代

大村氏19代(初代藩主)大村喜前は、朝鮮の役から帰り、慶長4年(1599年)玖島城を築いて移りました。以来12代藩主純熙(幕末)に至るまでの270余年間ここが二万七千石大村氏の居城となりました。長崎が没収され、幕府のキリスト教禁教政策のもと、キリシタンが盛んであった大村藩では特に厳しい禁教策が求められ、藩政の大きな課題となりました。この間、近世大名としての基盤を築く過程において、御一門払い、3代藩主純信の跡目相続、“郡崩れ”といわれる潜伏キリシタン発覚事件などがありましたが、江戸中期以来は、産業の開発、学問の振興などに尽くして藩政の充実につとめました。幕末には勤皇思想が勃興し、三十七士を中心に藩論を統一して維新達成に大きな貢献を果たしました。

明治以降の大村

中央では、政界、財界、学界にわたり、大村出身者は大いに活躍し、また大村は東彼杵郡の経済の中心地でした。明治30年(1897年)陸軍歩兵連隊の駐屯を契機とし、大正11年(1922年)には海軍航空隊が設けられ、つづいて昭和16年には東洋一といわれた第21海軍航空隊が設置され軍都として栄えました。昭和17年に1町5村が合併し、市制を施行しました。

古代の遺跡

こがね
黄金山古墳 バス宮小路下車 20分 今富町

今富町の小高い丘の上にあり、終戦直前、海軍が砲台を建設した際に発見されたもので石棺系横口式石室の上に封土した円墳とみられ、石室部はほとんどこわされています。石郭内部には赤色の酸化鉄（ベンガラ）が塗布され、人骨や鉄剣・土師器が出土しました。

小路口鬼の穴古墳 市指定史跡 バス竹松駅下車 5分 小路口本町

6世紀代に造られたと見られるこの古墳は、地元では、古くから鬼の穴として知られており、郷村記にも「鬼穴之事」と書かれてあります。このことから江戸時代には、すでに石室が開口していたことがわかります。現在は入ることはできません。石室は、ほぼ南に向かって開口しており、複室構造の石室である事がわかります。部屋からは、人骨や副葬品などの遺物を見つけることはできませんでしたが、古墳の前庭部と思われる箇所から須恵器の一部が出土しており、その型式から7世紀代のものと考えられ、追葬が行われたものと思われる。

玖島崎古墳 市指定史跡 バス公園入口下車 15分 玖島1丁目

大村湾に突き出す玖島崎の丘の上に、古墳時代終末期の群集墳が築かれています。すでに墳丘が削り取られ、石室の天井は破壊されて内部がむき出しになっていましたが、比較的石室の形状をよくとどめ、6世紀から7世紀前半のものとして位置付けられています。



沖田条里跡 沖田町

郡川下流の沖田町から黒丸町にわたって、水田が碁盤の目のように整然とした所があります。これは、近年区画されたものでなく、古代の「条里制」の名残です。条里制は大化の改新（645年）以前から始まっているといわれ、それが整然となったのは、大宝元年（701年）の大宝律令により、班田収授法が行われてからといわれています。

寺院と神社

延命寺跡 バス東光寺下車 5分 松原 3丁目

松原三丁目にあった禅宗の寺院です。創建年代はわかりませんが、郡七山十坊の一つです。「紫雲山延命寺 天平戊子念八月」と彫った標石が、大村市歴史資料館に所蔵しており、天平戊子の年は、天平20年（748年）に当たるため、この年にはすでに延命寺が存在していたと思われます。しかし、山号が用いられていることから、この標石は後で造られたものと考えられます。天正2年（1574年）キリシタンによって焼き払われたあと、正保4年（1647年）十二社権現が建てられました。

長久寺跡 バス乾馬場下車 10分 乾馬場町

本堂川の川端にあった寺跡で、現在の長久寺天満宮の地にありました。太良山たらさん金泉寺住職阿音が同寺を隠居後、開祖となって建立したのがこの寺です。建立年代は不明ですが、阿音が天文9年（1540年）ここで亡くなっていることから、この年を少しさかのぼった頃と思われます。天正2年（1572年）キリシタン社寺焼き打ち後、元和9年（1623年）に3代藩主大村純信により再興され、現在は長久寺天満宮が建てられています。

宝円寺跡 バス鳥居前下車 15分 池田 2丁目

池田山にあった真言宗の寺院です。万治3年（1660年）4代藩主大村純長によって建立されました。本経寺が大村家の菩提寺という大村家の私的寺院であったのに対して、宝円寺は大村藩の祈願寺という公的立場にありました。そのため領内各戸より銭3文が維持費として集められましたが、無檀家に等しく、明治4年に廃寺となり、現在は300段に及ぶ石段だけが当時の面影を残しています。

白水寺跡 バス福重下車 10分 皆同町

禅宗の寺で、郡七山十坊の一つでした。境内には、第17代領主大村純前すみあきの墓所がありましたが、天正2年（1574年）キリシタンによって寺とともに取り壊されました。その跡に正保4年（1647年）家老大村彦右衛門によって観音堂が建立されましたが、大風で倒壊したので、文政12年（1829年）石祠が再建されました。

妙宣寺 バス福重下車 20分 福重町

福重矢上にある日蓮宗の寺です。郷村記によると慶長7年（1602年）初代藩主大村喜前よしあきにより建てられ、仙乗院日順上人によって開かれました。喜前は、いち早くキリスト教を棄教し、肥後本妙寺から日真上人・日順上人を招いて領内に日蓮宗を広めました。現在の本堂は、廃寺となっていた池田山の宝円寺の本堂を買取り、移築したものです。

本経寺／大村藩主大村家墓所 国指定史跡

バス乾馬場下車4分

古町にある大村最大の日蓮宗寺院で、大村家の菩提寺です。江戸時代初期にキリスト教が禁止されると、初代藩主大村喜前よしあきはいち早くキリスト教を棄教し、日蓮宗に帰依しました。その証として建立されたのが本経寺です。建立年代は慶長13年（1608年）頃であったと思われます。

大村家墓所には、藩主・領主13基、正室・側室16基、一族家臣など合わせて78基、石灯籠481基が群立しています。6mを超す巨大な墓が建ち並び、様々な様式の墓は見事な石造美術品です。キリシタン大名であった大村家が、禁教下で、キリスト教を棄て仏教信仰を幕府や領民に証明するために巨大な墓を建てたと考えられます。キリスト教から仏教へという宗教政策を示す文化財として、国の指定を受けています。



長安寺 JR 大村駅より徒歩5分 武部町

大村駅裏手の丘に建つ浄土宗の寺院です。天正2年（1574年）キリシタンによる社寺焼き打ちにあい、壊されましたが、江戸時代に大村純忠の娘（二の丸殿）の強い勧めにより、慶長14年（1609年）に藩主大村喜前よしかきによって建立されました。当寺院は捕鯨業を営んだ深澤家の菩提寺であり、境内には、深澤儀きだゆう太夫勝清を始めとする深澤家の墓碑・鯨の供養塔・千日念仏回向鯨碑などがあります。境内の石造物として目を引くのは、本堂正面に建つ石門です。文化8年（1811年）長崎本紺屋町の尾道熊治の建立で、長崎のアーチ橋の技術をもって築造されています。



正法寺 バス新城入口下車7分 杭出津2丁目

浄土真宗の寺院です。キリスト教が浸透していた大村藩では禁教時代に入り、それを一掃するために日蓮宗と浄土真宗の徹底的な布教を行いました。その一方の浄土真宗の要の寺院として建立されたのがこの正法寺でした。大村藩の領民の宗旨は、日蓮宗と浄土真宗の二つが大半を占めますが、その浄土真宗の領内本寺の立場にあったのがこの正法寺でした。享保2年（1717年）に鶴亀橋の南側から現在地に移転され、天明元年（1781年）、大正13年と二度にわたり火災にあい、現在の本堂は昭和4年に再建されたものです。

東光寺遺跡 市指定史跡 バス東光寺下車3分 松原1丁目

旧福重村草場（現松原1丁目）にあった禅宗の寺院です。もともとは真言宗の寺院で、郡七山十坊の一つです。寺領130石余りを有したと伝えられ、郡七山の中でも最も大きな寺院でした。境内には、正しょう和5年（1316年）の銘がある東光寺住職性元しょうごんの墓石の一部があり、ここに刻まれている正和5年の年号は、大村地方に残る金石史料の中では、最も古い年に当たります。石祠の中に安置されている銅造薬師如来坐像は、大村市有形文化財に指定されています。



旧円融寺庭園 国指定名勝（昭和51年12月27日指定）

バス裁判所前下車5分 玖島2丁目

ここは承応元年（1652年）4代藩主大村純長により、創建された天台宗の寺跡です。純長は幕府勘定奉行伊丹勝長の4男で、3代藩主大村純信の養子となりました。しかし、幕府の正式な許可がないうちに純信が亡くなったため、大村藩では大変困りましたが、将軍家光の裁可によって相続が許されました。この恩義に報いるため特に願い出て、徳川家の位牌



を祭った寺でした。創建にあたっては、捕鯨業ほいりで我が国屈指の資産家となった深澤儀太夫勝清の寄進を受けました。明治元年に廃寺となり、現在は護国神社となっています。鳥居をくぐると左右に二つの池があり、石段を上がると正面に枯山水の石庭が広がっています。この庭園は、本堂及び書院の裏庭として造られたものと思われます。山の傾斜を利用して、これを築山風に見立てた様式であり、高さ8m、幅50mの斜面には約400個もの自然石を使って、三尊方式の石組を基本とした立石が配置してあります。中央部及び左側には、数段の水落石を用いた豪華な枯滝があります。水落石には白色の石灰岩を用いてあり、いかにも自然の滝の水が落ちているようです。川の流れは、白い玉砂利で表してあります。江戸時代に造られた地方庭園の中では、規模、造形とも傑出しており、貴重な文化遺産です。

こうてんぐう

昊天宮

バス宮小路下車1分 宮小路2丁目

彼杵郡最古の神社であり、彼杵郡全体の総産土神そうぶつすながみであったと思われる。当社が記録上に初めて登場するのは、元徳4年（1332年）のことです。（福田家文書）ただ当時の鎮座地は現在の場所ではなく、郡中学校南側付近に建っていました。

ごんげん

山田権現跡

（山田の滝） バス中諏訪下車40分

山田の滝の下手にあった神社です。創建された時代は不明ですが、郷村記に「永享、康正年中の事蹟今なおあり」と記されていることから、15世紀の前半には、すでに鎮座していたことが知られます。社殿の周辺には山田の滝が流れ落ち、奇岩に満ち、桜や楓が植えられ、景勝の地でした。幕末に倒幕運動を起こした大村藩勤王三十七士は、人目につかないこの山田権現にひそかに集まり、倒幕の計画を練ったと伝えられます。現在は昭和32年の大水害により現況が大きく変化し、かつての景観を失うこととなりました。

城跡と古戦場ほか

寺 島 市指定史跡 バス公園入口下車 15 分

久原 1 丁目の西海岸にあり、大村氏の祖が初めて上陸したとの伝説がある島です。

大村氏の起りには、いろいろな説がありますが、大村家の史料によると、平安時代中期の正暦 5 年（994 年）藤原純友の孫である直澄（大村家の始祖）が従五位下遠江権守に任じられ、肥前の藤津・彼杵・高来



の 3 郡をたまわりました。そこで、四国の伊予の国（愛媛県）大洲から、船を利用して大村に下向してきました。従う部下には朝長・富永・久門・河野・小船串・馬場・堀池など数人でした。目的地の大村で第一歩を印した所が寺島です。これを聞いて付近の乙名（町や郷の代表）たちが出迎え、あいさつを申し述べたとなっています。この時、船をつないだといわれる夫婦石という二つの石が残っています。島内には、寛文元年（1661 年）4 代藩主大村純長が弁財天を祭り、その別当寺として寺島山吉祥院が久原にありましたが、寺島に移されました。吉祥院は元禄 7 年（1694 年）大風で壊され、次に多々良に移されました。明治 3 年に弁財天を廃し、祭神を市杵島比咩命にかえ、市杵島神社と称しました。

大村館跡 バス本堂川橋下車北側 乾馬場町

この館は「川端御館」ともいわれ、中世の大村家が、ふだん居住した所と言われます。大村家 18 代純忠も天文 7 年（1538 年）6 才の時、有馬家から純前の養子として、この館に 25 年過ごしたといわれます。永禄 7 年（1564 年）三城城跡とともに城へ移り住み、その後、この館は重臣に与えられ、江戸時代には武家屋敷として分けられています。

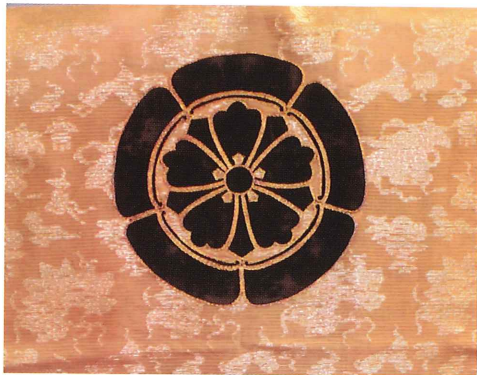
久原城跡 バス本小路下車 3 分 玖島 1 丁目

大村家の史料によると、藤原直澄が正暦 5 年（994 年）大村に下向して、久原城に入り大村氏を名乗ったと伝えられていますが、別の史料などの調査によると、大村氏は藤津荘の平姓大村氏が武士団となって、戦国時代の初期の戦乱により、藤津を追われ彼杵郡に入り領主になったという有力な解釈も出ています。

大村家家紋の由来

これについて次のように伝えられています。

鎌倉時代のはじめ、大村家^{つね}7代忠澄は、兄の有馬経澄^{すみ}（庶子のため分家）と共に京都大番役として御所の守護に当たっていました。たまたま京都のまちに大火があり、御所も危うくなりましたが、警固の者たちの働きによって、やっと類焼を免れることができました。この時の兄弟の働きは拔群だったため、天皇は兩人^{ただたれ}は直垂の袖で拝受しましたが、瓜面の跡が鮮やかに残り、いつまでも消えませんでした。それ以来大村家の紋は五ツ木瓜を用いることになったといわれています。



よしたけ
好武城 バス福重下車6分 寿古町

戦国時代、大村氏 15代大村純治^{すみはる}は相次ぐ有馬勢侵攻にそなえ、久原城だけで敵を防ぐのは困難と判断し、福重に要害の地を選び好武城を築きました。南のほうに郡川があり、西北は深田で守備堅固の城でした。

今富城跡 バス福重下車5分 皆同町

文明年間（1469年～1486年）大村氏 16代純伊^{すみこれ}は、父純治^{すみはる}の死後その跡目を継ぎましたが、有馬勢の攻勢がますます激化するので、さらに備えを固くするため、父が福重に築いた好武城^{よしたけ}のすぐ近くで、現在の市福重出張所の裏山一体に今富城を築いてここに移りました。

この城も郡川を前にし、後ろは深田に囲まれた要害の地でした。しかし、激しさを増した有馬勢の侵攻に抗しきれず、文明6年（1474年）16代純伊^{すみこれ}は中岳の合戦に敗北し、以後6年間、有馬氏の領有となりました。以後、折尾瀬（佐世保市内）、佐々（北松浦郡内）^{かから}良島（佐賀県内）へと逃れましたが、6年後田領地を取り返すことができました。

日本初のキリシタン大名として有名な18代大村純忠が、永禄7年(1564年)に完成させました。子の喜前が玖島城へ移る慶長4年(1599年)まで、大村氏の居城でした。多良山系からのびる尾根の先端を利用したこの城は、石垣がなく、堀や土塁で守られた中世の城の特徴を持っています。

元亀3年(1572年)には、武雄の後藤氏、諫早の西郷氏、平戸の松浦氏の軍勢に急襲包囲されましたが、わずかな手勢でこれを防ぎ、勝利をおさめたという「三城七騎籠り」が起きました。現在、主郭(本丸)跡には、長崎県忠霊塔があります。主郭東側の曲輪では発掘調査が行われ、大規模な堀、土塁や建造物跡が見つかり、当時の生活用品や鉄砲の弾が出土しました。

くしま

玖島城跡

バス公園入口下車3分 玖島1丁目

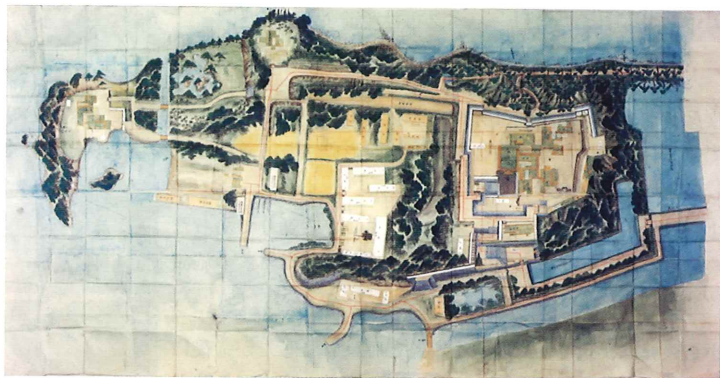
慶長4年(1599年)、初代藩主大村喜前が築城してから12代藩主純熙の代(幕末)まで、270余年間大村氏の居城でした。喜前は、秀吉の死後、天下の乱れを恐れて防備を固くするため、朝鮮の役での教訓を生かし、三方を海に囲まれた要害の地玖島を選んで本城を築き、三城城よりここに移りました。

慶長19年(1614年)大改修を行い、最初北側にあった大手を、現在のように南側に移しました。この大改修の設計を、築城の名人加藤清正に指導を仰いだと伝えられています。本丸には天守閣はなく、平屋の館がありました。城の石垣は、当時のまま良く残っており、特に南堀に面した石垣の美しい勾配は壮観です。

海に囲まれた玖島城には、御船蔵、新蔵波止、船役所跡など海運に関する施設が多く残っており、海城の特徴をみることができます。また、遠浅のため敵の兵が上陸できない上、城近くの遠浅の海の中には捨堀を設けるなどしていましたので、一見平凡そうに見えても難攻不落の名城でした。

明治17年(1884年)、本丸跡に歴代の藩主を祭る大村神社が建てられ、現在では桜・花菖蒲が咲き誇る大村公園として広く市民や観光客にも親しまれています。





大手入口門跡 現在の公園入口一の鳥居の地点にありました。

ふたえ
二重馬場 大手門入口より大手口に通じる2本の道路をいい、慶長19年(1614年)に造られました。人道と馬・荷車の道に分けられたものです。

大手門跡 現在の大村公園四の鳥居の地点で、延宝5年(1677年)に門櫓が造られ、嚴重な門扉で入口を開閉していました。

本丸跡 本丸は東半分が藩主居住地、西半分がまつりどころ政所でした。3,527坪余の内、建物敷地が648坪、本丸の周囲は、延250間、高さ5尺8寸の堀で囲まれ、矢狭間121個、鉄砲狭間123個、石火矢狭間6門が設けてありました。

いたじきやぐら
板敷櫓台跡 大村公園の南側にあり櫓を復元しています。石垣は扇勾配の美しい曲線を描き、玖島城で一番美しい所です。

からめて
搦手門跡 本丸の北側にあり、築城当時の大手門です。

武家屋敷通り

大手門入口から岩船に入る橋の左手少し先までの本小路一帯が藩重臣たちの屋敷跡で、このほか上小路、外浦小路、小姓小路、草場小路、岩船、日向平、上久原、下久原が武家屋敷通りでした。今も上小路、小姓小路などでその面影が残っています。

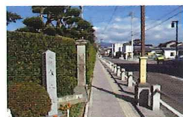
五小路武家屋敷通り

バス市役所前よりすぐ

玖島1丁目、2丁目、片町、久原1丁目

^{くしま} 玖島城下の武家屋敷街は5つの通りを中心としており、総称して五小路と呼ばれていました。玖島城築城後から通りが形成され、重臣などの住まいとなっていました。以下に五小路を紹介します。

^{ほんごうじ} **本小路** 大手門に通じ、武家屋敷街の本になる通りであったため、本小路と名付けられました。藩校や会所など藩の施設が多くありました。



^{うわごうじ} **上小路** 元は、地名から尾ノ上小路と呼ばれましたが、後に省略して上小路と呼ばれるようになりました。家老屋敷跡など石垣が良く残る通りです。



^{こしょうごうじ} **小姓小路** 当初、殿様の側仕えをした小姓が住んだことから小姓小路と呼ばれました。石垣が最も良く残っている通りです。



草場小路 地名をとって、草場小路と名付けられました。五色堀や旧円融寺庭園が残る通りです。



^{ほかうらごうじ} **外浦小路** 最初、外浦衆が住んだことから外浦小路と呼ばれました。後には家老などが多く住まいましたが、現在は通りそのものが無くなっています。



長崎街道

江戸時代、長崎から小倉を結んだのが長崎街道です。鎖国の中、幕府唯一の対外貿易港であった長崎から様々な品物や情報がこの街道を通り全国へと伝わっていきました。街道は、大村市内を南北に通じ、通り沿いに様々な文化財が残っています。また、市内には大村宿と松原宿の2つの宿場跡があり、宿場の歴史を活かした町おこしが行われています。諫早領との境の鈴田峠は、当時の景観が良く残っているとして、文化庁により歴史の道百選に選ばれています。

大村宿 大村駅より徒歩5分 本町

大村宿は、現在の中央商店街本町アーケード沿いにありました。本陣や脇本陣、高札場などがあり、本陣には捕鯨で有名な深澤家の屋敷が使われました。

松原宿 松原駅より徒歩5分 松原本町

大村宿から北に約10kmにある宿場でした。本陣などはなく、茶屋があり、大村宿と彼岸宿の間の休憩をとる宿場でした。八幡神社や旧松屋旅館などがあり、当時の景観を良く残している地区です。

鈴田峠 バス二本松より徒歩30分

大村領と諫早領との境の峠で、当時の景観が良く残っている箇所として、文化庁歴史の道百選に選ばれています。駕籠立場跡や藩境石などをみることができます。

大村藩お船蔵跡 県指定史跡 バス公園入口下車10分 玖島1丁目

この船蔵は、元禄年間に大村藩4代藩主大村純長の代に、玖島城に付属する船蔵として構築されたもので、藩主専用船など藩の船を格納していました。3本の船渠を成す石垣がよく残っており、柱穴が残っていることから、当時は屋根があったと思われます。

大村藩の領地は、大村湾を取り囲む形をしており、海上交通は特に重要視されていました。この船蔵はそのような海と密接な関わりがあった大村藩や玖島城の性格を示す重要な遺構です。



本陣跡 バス西本町下車1分

本陣とは江戸時代に各宿駅にあった最高級の旅館で、大名、公卿、幕府の役人などが宿泊しました。ほかに脇本陣があり、2人の大名が同駅に休泊する場合、格式上位の大名が本陣に、他の大名が脇本陣に泊まるならわしでした。

大村では4代藩主純長時代、捕鯨で有名な深澤儀太夫の邸宅が代々本陣に当てられました。今の本町の浜屋付近で間口45間余、奥行36間余、棟数12もあったといわれます。

大村藩砲学場跡 バス公園入口下車10分

慶応元年(1865年)藩内の砲術三家(千葉流、^{おぎの}荻野流、測山流)の私塾を廃し、前舟津に砲学場を開きました。ここでは鉄砲、大砲の砲術をはじめ、火薬、鉄砲鍛冶のことも学ばせました。背後の高台には鉄砲射撃の実技場である的場があり、今も南側に射撃の防壁となったとみられる高い石垣の一部が残っています。この砲学場は明治4年(1871年)に廃止されました。

中岳古戦場の跡 市指定史跡 バス田下車 10分 中岳町

文明6年(1474年)、島原の領主有馬肥前守^{なかつみ}貴純は2,000余の大軍を率い、諫早、本野を経て大村に来襲しました。大村氏16代純伊軍は700の手兵で防戦しました。

はじめ、有馬勢は大村方を小勢と見て強引に戦いを挑みましたが、先陣の長岡、庄の勢が奮戦して敵を追い返すこと4度、さしもの敵も攻めあぐんでいました。その時第3陣の鈴田道意が、突如敵方に寝返ったため形勢は逆転し、大村方



の将兵の多くは壮烈な戦死を遂げました。純伊は危うく難をのがれ、郡岳から松原、折尾瀬、佐々を経て玄海の孤島加々良島へと落ちのび、6年後の文明12年(1480年)旧領奪回を果たしたのですが、田原の中に残る長岡越前、庄左近太夫一族の墓が、今なお戦国の昔をしのばせます。

すがむた 菅無田古戦場の跡 市指定史跡 バス宮代下車 10分 中岳町

天正5年(1557年)、龍造寺隆信は、有馬氏の本拠島原攻略を進めるかたわら、有馬方についていた大村氏を制圧し、同時に外国貿易港長崎^{だんじょう}を得ようと、8,000人の大軍を率いて萱瀬^{うねめ}に来襲しました。大村勢は、萱瀬の郷士峰弾正、峰采女を大将に300人が菅無田砦に籠って防戦しましたが、2日間にわたる激戦でことごとく戦死を遂げました。しかし龍造寺方も700余人もの損害をうけたため、翌朝引き上げようとしたのですが、朝追岳^{あおい}の本陣を大村純忠に不意打ちされ、さらに大きな損害を受けて逃げました。

今はみかん園として開墾されていますが、その一角に峰弾正、采女などの墓があります。また麓には、その時戦死した乙女たちの墓もあり、百姓までもに奮戦した当時の模様がしのべれます。

文人・武人の史跡

大村彦右衛門の墓 市指定史跡 バス公園入口下車 15分 久原1丁目

大村彦右衛門純勝は、大村純忠、^{よしあき}喜前、純頼、純信に使えた大村家の重臣で、家老として、御一門払いやキリシタン禁制など、江戸時代初めの大村藩の難題解決に尽力しました。中でも特に2代純頼公が急死し、大村藩はお取りつぶしの危機になったとき、幕府に掛け合い、大村家の存続を認めさせた活躍は有名です。墓は久原1丁目にあり、巨大な墓石を見ることができます。また、幼君の身代わりとなって亡くなった娘の墓や身代わり観音もあります。



^{ごこうかん おなりもん}
五教館御成門 県指定史跡 バス公園入口下車 3分 玖島1丁目

大村藩の藩校として、203年間にわたり藩内子弟の育成が行われました。ことに維新前後には多くの有為な人材を出して有名になりました。藩校は最初集義館と呼び、寛文10年(1670年)城内桜田に建てられましたが、のち静寿園、さらに五教館と称して改築され、天保2年(1831年)本小路に移されました。



五教館とは、君臣義あり、父子親あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信ありの五倫の道を教える学校という意味です。幕末には士分だけでなく百姓、町人にも聴講を許したことは、当時としては画期的なことでした。また、校内には、治振軒と呼ぶ武芸所を置き、文武両道錬成につとめましたので、幾多の有名人を輩出しました。現在大村小学校に残る黒門は、御成門と呼ばれ藩主の出入りに使用したものです。

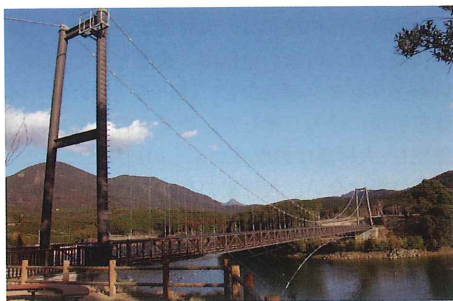
^{ほくちん}
千葉ト枕の墓 市指定史跡 バス桜馬場下車 3分 桜馬場1丁目

飯笹平六左衛門胤重はト枕と号し、代々砲術家として大村藩に仕え、大砲や軍鐘の鑄造に当たっていましたが、時の4代藩主純長より^{ほうこほる}放虎原の開拓を命ぜられ、寛文4年(1664年)以来、160余町歩の田畑を開拓しました。この一帯の道路には、松や桜の並木を植えましたので、^{なみ}並松、桜馬場の地名となりました。また、萱瀬村の黒木には杉苗7万本を、竹松、西大村付近には数万本の^{はぜ}榎と、紙の原料となる^{こうぞ}楮を植えるなど、産業の振興に大きな貢献がありました。

野岳湖と深澤儀太夫 バス野岳湖終点下車 東野岳町

深澤儀太夫は、九州捕鯨の草分けといわれ捕鯨で財を築きましたが、これを藩財政や社会事業に献金し、寺院の建立などを行いました。とくに領内の各地に溜池を築造し、灌漑の便を図りました。その代表的なものが野岳湖です。

野岳湖は当時の金で、4,200両の巨費を投じ、寛文元年(1661年)から1年7か月の歳月をかけて完成した周囲3キロの湖で、今なお周辺の水田を潤しています。現在野岳湖周辺は、多良岳県立公園野岳湖公園として県内外の多くの人々に親しまれています。深澤儀太夫勝清の墓は長安寺にあり、市文化財に指定されています。



川原悠々句碑／川原悠々の墓 市指定史跡

「常ならば 言い消す程よ 初霞」とする悠々の句碑は現在片町の八坂神社の境内に建てられています。また、大村公園中の島にも句碑が建てられています。

悠々は安永5年(1776年)千綿に生まれました。享和元年(1801年)江戸にのぼりましたが、生来病弱のため官職を辞し、郷里に帰り俳諧の道を志しました。天保4年(1833年)再び江戸にのぼり、俳人の蒼蚪、梅室らと交わり、芭蕉の流れを学び、有名な「荻菴集」を著わしました。後年、草場の池の坊に「三時庵」を結び、句作に専念しましたが、安政4年(1857年)後木場の自宅にて82才で亡くなりました。墓は須田の木町吹上墓地の一番上手にあり市指定文化財となっています。

斎藤道場跡 バス市役所前下車5分 片町

幕末、江戸の三大剣客の一人斎藤弥九郎の三男欲之助は、鬼欲という仇名があるほど稽古が激しく、得意の突きは天下無類といわれました。

安政元年(1854年)第12代藩主純熙に招請されて剣術師範となり、片町に新道場「微神堂」を建て神道無念流をひろめ、大村藩の武名を天下に高めました。斎藤欲之助の碑は玖島城大手門に入ってすぐ右手にあります。

旧楠本正隆屋敷 県指定有形文化財

バス裁判所前下車 10分 玖島2丁目

楠本正隆は、天保9年(1838年)岩船に生まれ、幕末の倒幕運動にも加わり、三十七士の一人として活躍しました。

明治元年5月、長崎府判事となり、新政府の要職にある井上聞太などと親交を深めました。明治3年に上京し、5年には外務大丞となり、ついで、新潟県令(知事)に任命され、様々な難題の解決に取り組み、名県令とうたわれました。



明治10年には東京府知事、12年元老院議員、22年東京市議会議長、23年衆議院議員、26年衆議院議長などを歴任し、29年男爵に除せられ、代議士を辞任し、35年に65歳で亡くなりました。

この屋敷は、明治3年に正隆によって建てられたもので、大村に残る貴重な武家屋敷遺構として公開されています。

開館時間は9:00～17:00 月曜・年末年始休館

入館料 大人 200円 小中学生 100円

古田山^{ほうそう}疱瘡所跡 市指定史跡

バス公民館前(大多武)下車 10分 東大村2丁目

文政年間、日本各地に^{ほうそう}疱瘡(今の天然痘)が流行し、大村でもその対策に悩まされていました。藩医長と俊達は天保元年(1830年)痘家となり、この古田山にあった患者の融離収容所に研究所を併設して、疱瘡の根絶に苦心しました。

俊達が当時画期的な種痘法といわれた人痘腕種法や、日本最初といわれる牛痘接種に成功したのはこの古田山でした。

長与俊達の墓 市指定史跡

バス裁判所前下車 15分 玖島3丁目

俊達は藩主の侍医俊民の次男として、寛政2年(1790年)に生まれました。長崎で洋医学を修め種痘法を研究し、藩命で種痘家となり、古田山に疱瘡所を開き、当時大流行の天然痘に対処しました。種痘についてはとくに研究を重ね、鼻種法を腕種法に改めて安全性を高めました。嘉永2年(1849年)遂に日本で最初といわれる牛痘に成功することができました。

長与専斎の旧宅 市指定史跡

バス長崎医療センター下車2分 久原2丁目

初代衛生局長として近代医学制度の基礎を築き、「衛生」の用語をつくったことで有名な長与専斎の旧宅です。

天保初年、祖父俊達きょうきせいによって建てられ「宣雨宣晴亭」と呼ばれました。専斎は幼少の頃この家で育ちました。当時は片町の海岸にありましたが、昭和33年、現在の国立長崎医療センター内に建物の一部を移築され、現在は専斎の雅号をとって「松香館しょうこうかん」と呼ばれています。



松林飯山の墓 市指定史跡

バス須田ノ木下車5分 須田ノ木町

飯山は天保10年(1839年)筑前国早良郡(現福岡市早良区)に生まれ、9才の時、母の郷里大村に移り住みました。幼時から神童と呼ばれ、五教館を経て江戸の昌平校で学びました。8年後大村に帰り五教館の学頭、教授となり、藩内子弟の教育に情熱をそそいで、勤皇思想を鼓吹しました。渡辺清のぼり、昇らと三十七士の血盟を交わし、尊王攘夷運動そんのうじょういに参加し、思想的中心人物として活躍しましたが、維新を目前にして慶応3年(1867年)29才で凶刃に倒れました。

のち従四位を贈られ、吉田松陰とともに靖国神社に祭られました。この墓は、飯山の遺徳を慕う門弟らが建立したものです。

浜田謹吾少年の像

バス公園入口下車10分 玖島1丁目

はしん
戊辰戦争で奥羽追討の北伐軍に大村藩により出征した326名のなかに、15才の少年鼓手浜田謹吾かりわのがいました。明治元年(1868年)9月14・15日、大村藩軍は暴風雨の中を刈和野(秋田県)で大いに奮戦し、角館へ転進かくのだてして大功をたてました。

しかし、謹吾少年は15日の刈和野の戦いで戦死しました。その血染の衣の襟には母が出征の際、わが子を励ますために書き記した歌が縫い付けてありました。「二葉より手くれ水くれ待つ花は君がためにそ咲けよこのとき」

これをみた現地の人々は大いに感激し厚く葬りました。こうした縁で現在、秋田県仙北市(旧角館町)と姉妹都市となりました。大村護国神社境内にも祭られています。

長岡半太郎屋敷跡 市指定史跡

バス長崎医療センター前下車5分 久原2丁目

長岡半太郎は、磁気学、地球物理学、原子構造論等の世界的物理学者として功績を挙げ、わが国最初の文化勲章を受けました。大阪帝国大学総長、日本学術振興会長を歴任しましたが、ノーベル賞を受賞した湯川、朝長両博士も半太郎の学術上の流れをくむ人です。久原2丁目にある屋敷跡は、半太郎が少年時代育ったところですが、父長岡治三郎が三十七士として、松林飯山、渡辺清・昇らと血盟を交わした所でもあります。

荒木十畝^{じっほ}の生家跡

バス長崎医療センター前下車5分 久原2丁目

十畝^{じっほ}は、明治5年(1872年)久原2丁目の朝長家に生まれ本名を悌二郎といいました。中学時代から絵を志し、上京して荒木寛畝^{かんぼ}に師事し、天分が認められ養子となり十畝と号しました。日本画壇の重鎮として、数多くの力作を残しました。芸術院会員、日本画会顧問、絵画会長、東京女子高等師範学校教授等を歴任しました。代表作には、「黄昏」「四季花鳥」「玄明」などがあります。昭和19年72才で没しました。

北川次郎兵衛(松田道獣)の墓

バス消防学校前下車10分 古賀島町

北川次郎兵衛は、戦国時代、奥州の伊達政宗に仕えていた武将です。関ヶ原合戦後、伊達家を出て浪人となり、その後、北川次郎兵衛宣勝と名を改め、豊臣秀頼に仕えました。大阪冬の陣・夏の陣で活躍しましたが、大阪城は落城。次郎兵衛は捕らえられてしまい、元和2年(1616年)幕府の名により大村藩(2代藩主純頼)に預けられ、以後、放虎原^{ほうこはら}に屋敷を構え、ひたすら原野の開拓に励みましました。後に幕府の恩赦があり罪が許され、次郎兵衛の放虎原での開墾の功が評価され、放虎原開墾の恩人として伝えられています。

伝鈴田道意の墓

バス二本松下車25分 大里町

鈴田道意は、戦国時代の前期に、大村氏16代大村純伊に仕えた武将で、純伊の姉を妻にするなど、重臣の一人でした。しかし、有馬氏との戦となった中岳の合戦では、大村家第3軍の将として出陣しましたが、有馬側に寝返り、これによって大村側は敗北し、領地を失ったと伝えられています。後に純伊が領地を回復した時に許され、再び大村家に仕えました。現在、道意の屋敷近くの墓地に道意のものと伝えられる墓が残っています。中世の武将の中として貴重な遺構です。

キリシタンの史跡



ザビエルが日本にはじめてキリスト教を伝えて14年後の永禄6年（1563年）、18代領主大村純忠は、ドン・バルトロメオの名で洗礼を受け、日本最初のキリシタン大名となりました。

純忠は、横瀬浦や長崎に港を開いて南蛮貿易をひろめ、日本の文化、社会の近代化に一役を負うとともに、領内のキリスト教布教を熱心に援助し、領内のほとんどをキリシタン化しました。当時領内のキリシタン数は6万人に達したといわれています。

さらに天正年間には、大友宗麟、有馬晴信の両キリシタン大名とともに、少年使節団をローマに派遣するなどして、大村のキリシタンは全盛時代を迎えました。

天正15年（1587年）純忠は没しましたが、まもなく秀吉によりキリシタン禁令が下り、さらに徳川の天下となってキリシタン禁圧がいよいよ厳しさを加えたため、19代（初代藩主）大村喜前はついに日蓮宗に改宗して、慶長10年（1605年）本経寺を建立し、キリシタン宣教師を領外に追放しました。

やがて慶長17年（1612年）、幕府のキリシタン禁令が発布されるに至って、キリシタン迫害の手が日増しに激しさを加えはじめ、連年殉教の血で彩られましたが、なかでも明暦3年（1657年）に起きた「郡崩れ」と呼ばれる潜伏キリシタン発覚事件は、406人が斬罪になるという悲惨な結果となりました。市内には殉教の哀史をとどめる遺跡が数多く残されています。

ほうこぼる

放虎原殉教地（斬罪所跡）

バス市民病院前又は試験場前下車 10分 協和町

明暦3年（1657年）、大村藩郡村（今の竹松、福重、松原）^{こおり}矢次の百姓兵作が、長崎に向いたときふもらした言葉から、郡村の百姓を中心に潜伏キリシタンが芋づる式に検挙され、ついに603人に及びました。

彼らは、大村、長崎、平戸、島原、佐賀の五ヶ所に収容され、吟味を受けた結果、406名が斬罪と決まり、このほか、78名牢死、20名永牢、赦免99名となりました。

大村では、万治元年（1658年）7月、放虎原において131人が、長崎その他で275人がそれぞれ処刑されました。この大殉教を「郡崩れ」^{こおり}といいます。

131人が一斉に処刑された放虎原殉教地は、県立大村工業高校の右手前方にあり、銅板のレリーフをはじめ込んだ大きな殉教顕彰碑が建てられています。



妻子別れの石

放虎原殉教地（斬罪所跡）より東南へ10分 杖出津3丁目

受刑者たちは、ここで妻子と水盃を交わして最後の別れを告げ、殉教地（斬罪所）へひかれていきました。現在別れの石数個が残っており、俗に「涙石」とも呼ばれ今でも苔が生えないと伝えられています。



仏の谷 バスダム下 中岳町

萱瀬ダム下の山中の旧斜面を登って行くと岩穴があり、ここが郡崩れの発端となったキリシタンの絵が隠されていた場所とされています。

獄門所跡 バス松並公園前下車5分 松並1丁目

郡崩れの際、処刑された131人の首を塩づけにして、ここで20日間さらし首にし、世人への見せしめとしました。今は白亜の無原罪の聖母像が建てられ、遠い昔の殉教者たちの霊を優しく慰めています。

胴塚跡 バス桜馬場下車5分 桜馬場2丁目

桜馬場の国道沿いの西側に胴塚跡があり、131人の胴体は2か所に穴を掘り埋めたと伝えられています。150m南に青銅の祈りの像が建っています。



首塚跡 バス原口住宅前下車3分 原口町

胴塚より北方約500m離れた榎の根元に殉教者131人の首を埋めたと伝えられています。首と胴を別々に埋めたのは、キリシタンの妖術でつながるのを恐れたためと言われます。今は立派な殉教顕彰碑が建てられています。



大村牢跡（本小路牢） バス公園前下車5分

慶安元年（1648年）本小路につくられました。俗にこの牢を公儀牢と呼んで、唐人牢を兼ねキリシタン囚人や、特別に幕府の指名によって捕まえた罪人を入牢させていました。万治年間、袋小路の牢が取り壊しになったあと、一般の罪人もこの牢に収容しました。

鈴田牢跡 バス釜川内下車5分 陰平町

元和3年（1617年）より同8年まで、外国人宣教師ら30数名を閉じ込めた牢屋の跡です。周囲も天井も竹の柱で囲まれた鳥籠のような部屋で、広さは奥行6.6m、間口4.6m、横に寝ることも身動きさえ自由にはできなかつたと伝えられます。2名牢死、スピノラ神父ら25名は元和8年9月長崎へ護送され、翌10日西坂において、フランコ神父ら8名は12日放虎原で殉教しました。



オランダ牢跡

御朱印船の船長として、海外貿易を行っていた浜田弥兵衛は、寛永5年（1628年）台湾のオランダ館に討ち入り、奪われていた商品を取り返したほか、オランダ大守の息子らを人質として日本に連れて帰り、付添人とも53名を大村と島原

に分けて収容しました。大村の牢屋は、現在の大村バスターミナルビルの所であり、オランダ牢と呼ばれました。また、牢の横のV字形の溝をオランダ溝といいました。浜田弥兵衛の碑は大村公園の中に建てられています。

今富のキリシタン墓碑 県指定有形文化財

バス宮小路下車 25分 今富町

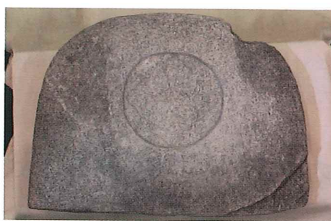
戦国末期における大村の重臣、一瀬越智相模榮正^{おちさかみえしやう}の墓です。榮正は領主大村純忠とともに、永禄6年（1563年）キリシタンの洗礼を受けた一人ですが、天正4年（1576年）83才で没しました。

その子一瀬治部大輔^{しほふだゆう}は、父のため頭頂部に干（かん）十字架を刻んだかまぼこ型の墓碑を建てましたが、禁教の取り締まりが厳しくなったため、墓碑を縦に起こし、前面に日蓮宗の戒名を刻んで、仏教徒であることを装ったのではないかと思います。キリシタン墓碑としてはわが国で最も古いようで、またかまぼこ型の起立墓碑は全国でも珍しいといわれています。



大村市原口郷出土のキリシタン墓碑 県指定有形文化財

上部に花十字、下部には欧字で（BASTIAN・バスチャン）（FIOBV・ヒョウブ）の陰刻がある板碑式墓碑で、このように霊名と俗名を二段に記した墓碑は他に例をみません。鬼橋町より出土したもので安土桃山時代～江戸初期ごろの相当な地位にあった人物の墓と推察されます。高さ 50.3cm、最大巾員 68.5cm、厚さ 2.5～4.5cm 半楕円形です。



田下のキリシタン様式墓碑 市指定史跡

バス宮代下車 5分 田下町

田下の入口にあり、承応2年（1653年）建立の平庵型墓碑^{ひらいおり}が2基見られ、仏教の戒名を1基は本体に、1基は側塔に刻む特徴をもつ珍しいものです。背後の野面墓1基は、キリシタン様式墓碑と同一戒名で、これは弾圧に耐えがたく後方に仏式の墓を建てたものと思われる。

大村出土のメダリオン「無原罪の聖母」 県指定有形文化財

太陽を背に頭上に7星をめぐらし、弦月を踏んで立つ「無原罪の聖母」のメダリオン（大型メダル）です。昭和7年大村高校新築工事の際、寛永16年（1639年）の墓碑銘の大村家家老宇多氏の墓から出土したもので、スペイン王カルロス一世の代（1516年～1556年）にマドリッドの王立造幣局で製造されたものです。全長11.4cm、最大巾員7.4cmの楕円形で、掘り出すとき二つに割れたものと思われま



宝生寺の教会跡 三城町

御やどりの聖母の教会を永禄11年（1568年）18代純忠が建立したが、元亀3年（1572年）三城七騎籠りの時焼けたので、天正2年（1574年）旧宝生寺の脇に建立されました。領内でもっとも大きな教会堂で、場所は三城城跡の前の田の中にありました。純忠の遺体は最初ここに葬られました。戦前まで、泣きびす山という塚があって、温石の五輪塔などがあり、殿様の墓との言い伝えもありました。

大村純忠終焉の居館跡（大村純忠史跡公園）市指定史跡

バス坂口下車3分 荒瀬町

荒瀬町大門にあります。時の重臣庄頼甫しょうよりすけの屋敷でしたが、のち、龍造寺隆信の圧迫によって領主の座を退いた18代大村純忠の晩年の隠居所となりました。純忠は、ここでひたすらキリシタンの信仰に明け暮れる余生を送っていましたが、天正15年（1587年）波乱に富む55年の生涯を閉じました。現在、館の川と呼ばれるところは庭園の一部であったと伝えられています。



天正遣欧少年使節顕彰之像 バスサンスパおおむら下車3分

天正10年(1582年)ヴァリニアーノ神父は、大村純忠、大友宗麟、有馬晴信のキリシタン大名とはかり、伊東マンショ、千々石ミゲル、原マルチノ、中浦ジュリアンの4少年をローマに派遣しました。ヨーロッパのキリスト教文化を見聞させ、日本をヨーロッパに紹介するためでした。一行は長崎港を出港し、マカオ、マラッカ、インド、喜望峰をまわり2年半かかってヨーロッパに渡り、ローマ教皇と謁見しました。そして出発してから8年5か月という大旅行のすえ、天正18年(1590年)帰国しました。少年達は、活字印刷機械などヨーロッパの進んだ技術や知識を持ち帰りました。彼らが長崎港を出帆して400年目を記念し、4少年の偉業をたたえるため、顕彰像が建てられました。



伊東
マンシヨ

中浦
ジュリアン
原
マルチノ
千々石
ミゲル

郷土芸能

黒丸踊 国指定重要無形民俗文化財

黒丸町に伝わる豊年感謝、平和祈願の古典色豊かな、勇壯で華麗な踊りで、最初は大薩摩とよびました。由来は、16代領主純伊が戦いに敗れ、6年の流浪の後、文明12年(1480年)大村領を奪回したとき、その戦勝を祝って舞った踊りで、中国地方からきた浪人法養が教えたといわれています。今も黒丸保存会によって五百年來伝えられた踊りをそのまま伝承しています。このほか、同じ由来をもつ踊りとして、沖田踊があります。



歌詞の一部 入羽

今年よりしてみろくとし 金の斗かきにこがね櫛
白金たわらで米はかる
御所に参りて御門を見れば 白銀御門に黄金の扉
やら見事 やら見事

寿古踊 国指定重要無形民俗文化財

別名殿様踊とも呼ばれています。踊り子の中の1人は舞太鼓といって殿様を意味し、囲みの者は垣踊といってお供の人が殿様を守りながら踊る意味です。

歌詞の一部

めでたき御代の始めかな
めでたき御代の始めかな
千代に八千代にませ国重なりて
御代久しかり久しかり



沖田踊 国指定重要無形民俗文化財

別名なぎなた踊りとも呼ばれています。多数の人々がなぎなたで斬り合いながら舞うものです。

歌詞の一部

こころべあいのしやくあり
ねやをよれば かたのいたえん
くれないはぬれて色ます
ねやよめごは殿とねてます

その他の郷土芸能

その他市内には次のような郷土芸能が伝わっています。

今村 <small>ふ</small> 浮立 <small>りゆう</small>	下鈴田浮立	日焼浮立	大村獅子舞
水主町ココデシヨ	大村龍踊	木場龍踊	田下浮立
原町獅子舞	荒瀬浮立	小路口鉄踊	立福寺龍踊
松原女相撲	野岳龍踊		

大村寿司の由来

文明6年(1474年)大村氏16代すみこれ純伊は、大村領に押し寄せた島原の有馬勢2,000人の大軍と中岳で合戦しましたが、味方の寝返りもあり、大村方の将兵の多くは壮烈な戦死を遂げました。純伊は危うく難を逃れて唐津沖の玄海の孤島かから加々良島に落ちのびました。そして6年後の文明12年(1480年)、渋江公勢らの援軍を得て大村領を奪回し宿願を果たしました。このときの領民の喜びようは大変なものでした。領民たちは、領主、将兵を迎え、早速食事の用意にとりかかりましたが、あまりに突然のことで食器が十分に揃わないため、とりあえずもろぶた(木製長方形の浅い箱)に炊き立てのご飯をひろげ、その上に魚の切り身、野菜のみじん切りなどをのせて押さえたものを食膳に供しました。将兵たちはこれを脇差して角切りにし、手づかみで食べたといわれ、これが大村寿司の起こりと伝えられています。

以来大村地方では、祝い事や珍客を迎えるときなどは、必ず大村寿司をこしらえることが習わしとなり、武家、町人、百姓それぞれに寿司の作り方が家伝として伝えられました。寿司桶は、嫁入り道具に欠かせないほど大切なものでした。500年を経た今も、その独特な製法は昔ながらに受け継がれ、風味ある角寿司として有名です。



民話紹介

「勘作ばなし」

むかし、三浦村に長沢勘作さんというとん智に長けた、とても愉快な人がいて、人々に愛され、親しまれていました。それらは勘作ばなしとして伝えられていますが、その中から「宝の石」というお話を紹介します。

大村領と諫早領との境に、とても立派な石がありました。ある日、両藩から役人がでて談判をしましたが、中々折り合いがつきません。思い余って勘作さんに相談すると「よろしい、引き受け申した。」と事もなげに現場へ来てみると役人が議論の真最中でした。勘作さんは心中期するところがあってか、あいさつもせず、ずかずかと皆の前に出て、「あいや、各々方には何をとやかく申しておられる、この石は神代の昔より大村のものと決まっているのに、今頃何のことでござるか。」突然現れた勘作さんの暴言を聞いた諫早側の人はかんかんに怒りました。

「馬鹿を申せ諫早領の石だ。」

「いいやたとえなんと仰せられても大村領のものに相違ござらぬ。」

「何を証拠にぐずぐずいうか。」

「貴殿たちこそ何の証拠があるか。」

「何と、この馬鹿野郎、もう許しておけぬ。」と諫早側のけんまくが最高潮に達したのを見てとった勘作さんは、得たりとばかり心の中でほくそ笑み、そしていかにも負けたように、

「ええと、さほどに欲しがられるなら、やむを得ぬ、びた一文で売ってしまうか。」
諫早側は、それ見よとばかり喜んで

「よろしい、びた一文で買った。それ一文だっ。」

こういって一文銭を投げ出したときでした。勘作さんは厳然として申しました。「あいやお待ちあれ。これは大村領のものに相違ござらぬ。たとえ銭一文たりとて、自分のものを買う馬鹿はござるまい。買うと言われるからには、諫早領の石ではないはず。売ろうと申したが、都合によって当分見合わせた。」

といいながらその大石に、墨痕あざやかに大村領と書いて用意して来た紙を貼り付け、あつけにとられた人々を尻目に

「さらばでござる。」とさっさと引き上げて行きました。

資料 大村氏系図

(大村家資料による)

初代	大村	なお 直	ずみ 澄	18代		すみ 純	ただ 忠
2代		もろ 師	ずみ 澄	19代	初代藩主	よし 喜	あき 前
3代		なが 永	ずみ 澄	20代	2代藩主	すみ 純	より 頼
4代		きよ 清	ずみ 澄	21代	3代藩主	すみ 純	のぶ 信
5代		とお 遠	ずみ 澄	22代	4代藩主	すみ 純	なが 長
6代		よし 幸	ずみ 澄	23代	5代藩主	すみ 純	まさ 尹
7代		ただ 忠	ずみ 澄	24代	6代藩主	すみ 純	つね 庸
8代		ちか 親	ずみ 澄	25代	7代藩主	すみ 純	ひさ 富
9代		すみ 澄	むね 宗	26代	8代藩主	すみ 純	もり 保
10代		すみ 澄	とお 遠	27代	9代藩主	すみ 純	やす 鎮
11代		すみ 純	おき 興	28代	10代藩主	すみ 純	よし 昌
12代		すみ 純	ひろ 弘	29代	11代藩主	すみ 純	あき 顕
13代		すみ 純	さと 郷	30代	12代藩主	すみ 純	ひろ 熙
14代		のり 徳	ずみ 純	31代		すみ 純	お 雄
15代		すみ 純	はる 治	32代		すみ 純	ひで 英
16代		すみ 純	これ 伊	33代		すみ 純	たけ 毅
17代		すみ 純	あき 前				

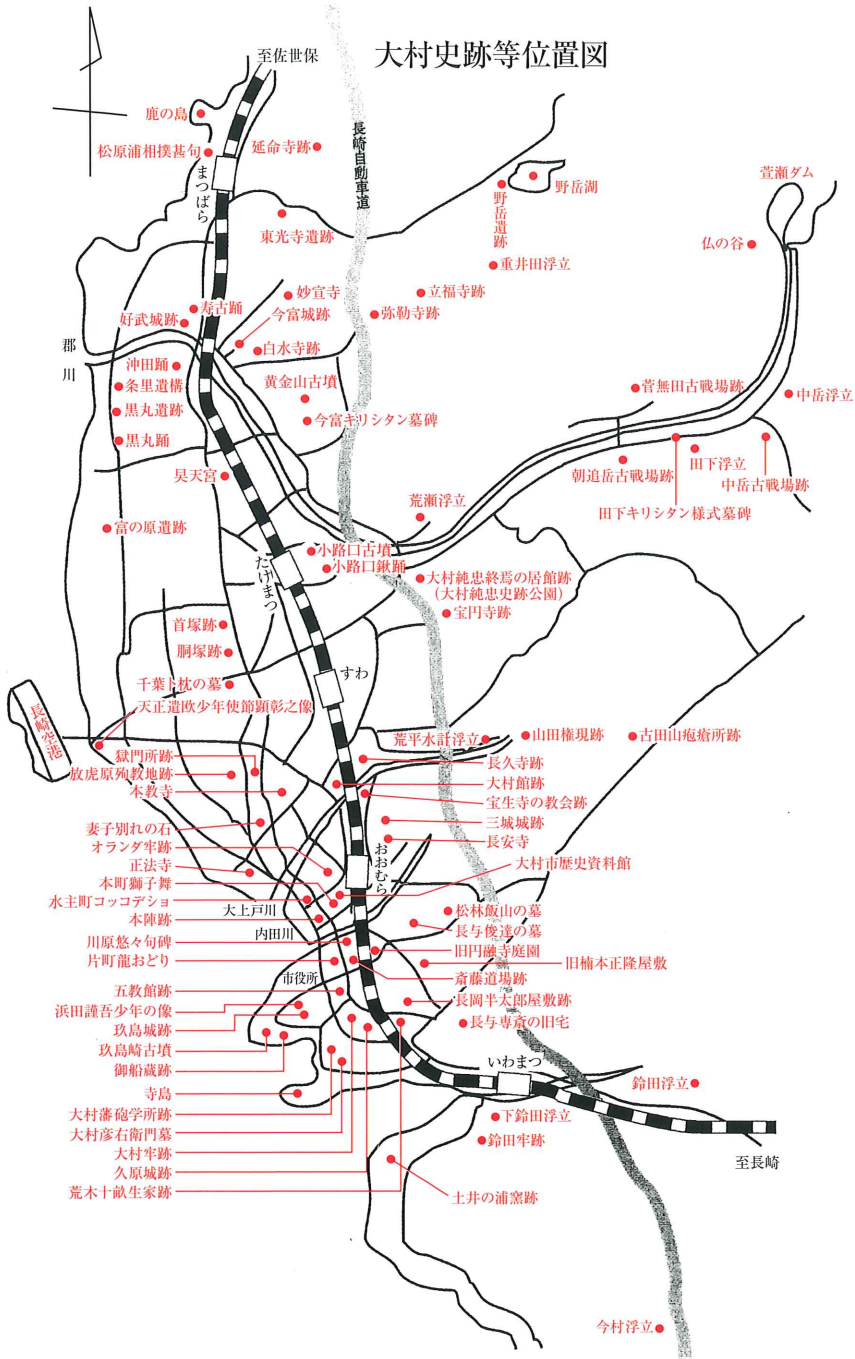
年 表

時代	元号・年	西暦・世紀	事 跡
		100万年前頃 80万～40万年前 1万5千年前	多良岳火山古期活動 多良岳火山新規活動 野岳遺跡
縄文		7千年前 晩期	大村湾が成立する 黒丸遺跡
弥生		早期2500年前	風櫃岳支石墓群、黒丸遺跡・擦切り石包丁
古墳		中期	黄金山古墳、小佐古石棺墓群、黒丸遺跡、楕形はそう、岩名遺跡
飛鳥	大化元 大宝元	645 701	大化の改新 大宝律令完成
奈良	天平年間	8世紀	肥前国風土記の成立
平安	延暦13 承平5・天慶2 正暦5	794 935,939 994	平安京に都を遷す 承平・天慶の乱。平将門、藤原純友が反乱 藤原純友孫の藤原直澄、伊予大洲から大村寺島に上陸と伝わる
鎌倉	建久3 安貞元 正和5 元弘3(正慶2)	1192 1227 1316 1333	源頼朝、征夷大將軍に任命、鎌倉幕府成立 大村小太郎が京都大番役を務める 東光寺住職阿闍梨・性元没(東光寺跡宝塔銘) 後醍醐天皇が隠岐を脱出、これにて足利尊氏、新田義貞等が呼応して倒幕挙兵
徳川幕府 室町(徳川)	建武元 延元3 永和元	1334 1338 1375	建武の新政 足利尊氏、征夷大將軍に任命、室町幕府成立 西大寺末寺として大村・宝生寺
室町 (戦国)	明德3(元中9) 宝徳4 応仁元 文亀元 天文7 天文12 天文14 天文18 永祿5 永祿7 永祿8 元亀2 元亀3	1392 1452 1467 1501 1538 1543 1545 1549 1562 1564 1565 1571 1572	南北朝合一 東光寺、真言宗から禪宗に宗旨変化 応仁の乱おこる 純伊、中岳原で有馬貴純と合戦か、一時敗走、史料上は文明6年(1474)、合戦否定説も 有馬賢純(後の晴純)、次男・勝童丸(後の純忠)、大村純前の養嗣子となる ポルトガル人が中国船に乗り種子島に鉄砲を伝える 大村純前の子・又八郎(後の貴明)を武雄領主後藤氏へ出す ザビエル、キリスト教を伝える ポルトガル船、横瀬浦入港 南蛮貿易開始 純忠、三城城を居城とする ポルトガル船、福田浦に初入港 長崎を開港し、朝長対馬守、長崎町割奉行を務める 後藤氏・松浦氏・西郷氏が三城城を急襲(三城七騎籠)、純忠間もなく彼らを撃退
安土桃山	天正2 天正3 天正8 天正10 天正13 天正15 天正16 天正18 慶長2 慶長4 慶長5	1574 1575 1580 1582 1585 1587 1588 1590 1597 1599 1600	純忠、キリスト教による支配に着手、大村領内の社寺が焼かれる 佐賀の龍造寺隆信、大村を攻撃(菅無田合戦) 純忠・喜前父子、茂木・長崎をイエズス会に寄進 アレッサンドロ・ヴァリニャーノ、ローマへ使節を派遣 豊臣秀吉、関白となる 秀吉、九州平定後、博多で「バテレン追放令」発布 秀吉、大村氏から長崎を没収し、鍋島直茂を長崎代官に任命 天正遣欧使節、長崎港に帰港 喜前、小西行長に率いられ、朝鮮半島へ出陣 玖島城築城 関ヶ原の合戦
江戸	慶長8 慶長10 慶長12 慶長19 元和元 元和2 寛永11 寛永14 正保4 慶安3	1603 1605 1607 1614 1615 1616 1634 1637 1647 1650	徳川家康、江戸幕府を開く 長崎が幕府領となる 喜前及び二代藩主純頼、「御一門払い」を実行し、大村庶家の所領を没収 大阪冬の陣、伏陣としての今富キリシタン墓碑 大阪夏の陣、豊臣氏滅びる 大阪の陣で豊臣秀頼に付いた北川次郎兵衛を大村藩へ預ける 北川は松田道猷と名乗り、放虎原を開墾 純信、三代将軍徳川家光の上洛に従う 島原・天草一揆が起こり、大村藩は長崎警固を命じられる 深澤組の捕鯨、操業開始 純信没 大村藩、老中に対し純長の相続願提出

時代	元号・年	西暦・世紀	事 跡
	慶安4	1651	純茂と大村内匠助政直が江戸城で純長の家督相続を許可される この年に円融寺庭園が作庭されたとされる、天保3年(1832)作庭説もある
	承応元	1652	
	明暦3	1657	
	万治年間	1658～61	
	寛文3	1663	
	寛文4	1664	
	延宝9	1681	
	天和3	1683	
	享保17	1732	
	安永7	1778	
	天明7	1787	
	寛政2	1790	
	文化7	1810	
	文政3	1820	
	文政6	1823	
	天保2	1831	
	天保12	1841	
	嘉永3	1850	
	嘉永6	1853	
	嘉永7	1854	
万延元	1860		
元治元	1864		
慶応元	1865		
慶応3	1867		
明治	明治元	1868	島羽伏見の戦い(戊辰戦争始まる) 戊辰戦争終結 大村藩、神社による戸籍編製に着手 廃藩置県。大村藩は大村県になるが、同年内に長崎県に併合 大日本帝国憲法発布 日清戦争 歩兵第四十六連隊、大村に移転 大村に鉄道開通 日露戦争
	明治2	1869	
	明治3	1870	
	明治4	1871	
	明治22	1889	
	明治27～28	1894～95	
	明治30	1897	
	明治31	1898	
明治37～38	1904～05		
大正	大正11	1922	大村海軍航空隊設置 大村、大村町合併
	大正14	1925	
昭和	昭和4	1929	世界恐慌 満州事変勃発 日中戦争勃発 第二次世界大戦勃発 第二十一海軍航空廠、開廠 大村市、市制施行(三浦村、鈴田村、大村町、萱瀬村、福重村、松原村が合併) 広島・長崎に原子爆弾投下、ポツダム宣言受諾。終戦 大村入国者収容所設立 ボートレース場大村設置決定 全国初のボートレース開催 武留路郷、大村市に編入 東京オリンピック開催 長崎空港開港 秋田県旧角館町(現仙北市)と姉妹都市提携 兵庫県伊丹市と姉妹都市提携
	昭和6	1931	
	昭和12	1937	
	昭和14	1939	
	昭和16	1941	
	昭和17	1942	
	昭和20	1945	
	昭和25	1950	
	昭和26	1951	
	昭和27	1952	
	昭和38	1963	
	昭和39	1964	
昭和50	1975		
昭和54	1979		
昭和55	1980		
平成	平成2	1990	天正遣欧少年使節帰国400年記念事業として大村少年使節団をヨーロッパに派遣 大村市体育文化センター(シーハットおおむら)竣工 郡三郎が国指定重要無形民俗文化財に指定 熊本地震
	平成10	1998	
	平成26	2014	
	平成28	2016	

MEMO

大村史跡等位置図





〒856-8686

長崎県大村市玖島一丁目25
大村市産業振興部観光振興課

TEL (0957) 53 - 4111

<http://www.omuranavi.jp/>

kankou@city.omura.nagasaki.jp

助成 (一財)空港振興・環境整備支援機構